

楽器フルートを革新し、大きな足跡を遺した19世紀の音楽家 T. ベーム

テオバルト・ベーム Theobald Böhm

(1794.4.9～1881.11.25)

ミュンヘン出身。父から貴金属の加工法を学ぶ。木製フルートを自作し、21歳で宮廷管弦楽団の首席フルート奏者に。1831年にロンドンでCh.ニコルソンの演奏を聴いたのがきっかけで、フルートの改良を本格的に着手する。50歳を過ぎてからミュンヘン大学で音響学を習い、1847年金属製フルートを開発して特許を取る。ロンドン、パリ万博で一般公開される。1871年“Die Flöte und das Flötenspiel”（フルートとフルート奏法）を出版。作曲家としても60余りのフルート作品、教師としても100人を超える生徒を育てた。



トーク&演奏： カタリーナ・ベーム＝プロカイン(フルート) Katharina Böhm-Prokein

ドイツ・バイエルン州で生まれ育ったカタリーナ・ベームは、フルート、サクソ、ピアノの指導を受けて育った。ミュンヘン音楽大学でジュニア学生としてフルートの芸術的訓練を始めた後、ライプツィヒ音楽大学でイルメラ・ボスラー教授のもと、オーケストラ奏法および音楽教師としての研鑽を積んだ。在学中より中央ドイツ放送交響楽団に任期採用され、2004年よりライプツィヒ交響楽団の首席フルート奏者を務めている。2022年には、テオバルト・ベーム国際フルートコンクール審査員を務めた。自身がテオバルト・ベーム直系の末裔であるため、ベームを中心としたフルートの歴史的背景の研究と紹介に尽力している。また古楽への傾倒から、トラヴェルソ課程も修了し、現代音楽と古楽のさまざまなアンサンブルと共演している。コンサートツアーでヨーロッパとラテンアメリカ、南アフリカと中国を訪れた。

カタリーナ・ベーム氏の自宅にて撮影された右の写真(カタリーナ・ベーム氏提供)は、ベーム家で代々受け継がれてきたベーム式フルートを持つ氏(左)とそのご尊父(右)が写っている。背景には一家の歴代人物写真や、テオバルト・ベーム氏の人物画が飾られている。これらの楽器は本講座でも披露される予定。



通訳： 松崎 ゆり(フルート、音楽理論) Yuri Matsuzaki

東京藝術大学卒業後、DAAD、文化庁、STIBET博士プログラムより奨学金を得て渡独、ライプツィヒ音大修士及び国家演奏家資格課程をイルメラ・ボスラー教授のもとで修了。現在はドレスデン音大現代音楽科講師を務める他、グラーツ芸術大学とチューリッヒ芸術大学の共同博士課程にて、ダイナミック・ノーテーションの開発と、認知科学の観点から再解釈するブライアン・ファーニホウの音楽とベームフルートの表現力を研究している。これまでにカールスルーエ国際現代音楽コンクールなどにて最高位を受賞し、ガウデアムス国際現代音楽週間(オランダ)、キエフ現代音楽週間、パリ・イルカム ManiFeste、ワルシャワ・ルトスワフスキ現代音楽祭、ヴィッテン現代室内音楽祭、ケルン ACHT BRÜCKE、ダルムシュタット夏季現代音楽講習会、ドレスデン・ヘレラウ現代音楽週間などに出演。アンサンブル・モデルンのもと、インゴ・メッツマッハー、ケント・ナガノ、エミリオ・ポマリコなどと共演。Wergo よりCD「Franz Martin Olbrisch – Craquelé」が発売されるなど、参加録音多数。